

北風と太陽～他人と接する際のアプローチ～

校長 近藤 幸栄

今年も木枯らし舞う寒い季節がやってきました。今年の秋は、初秋の昼夜の寒暖差が大きかったことや日照時間が長かったことなどにより“紅葉の美しい年”と言われているようですが、新発田市でもクマの出没が多く確認されるなど、安全が脅かされる秋ともなっています。

学校でも学校外でも、子どもたちのかかわりの中で、様々な問題は起こります。そんな中で、子どもの心に入っていく指導、他人との良好な関係を築くかかわり方など難しいものだと改めて感じます。子どもだからといって、頭ごなしに注意したり、正論だけをぶついたりしても上手くいかないことが多いことは大勢の皆さんが感じていると思います。



皆さんもよくご存じの、イソップ童話【北風と太陽】です。

ある時、北風と太陽が力比べをしようということになりました。ちょうどその時、通りすがりの旅人が歩いていました。「旅人の外套をどちらが脱がせることができるか」という勝負で決めることになりました。

まず、北風が力いっぱい吹いて外套を吹き飛ばそうとしました。しかし、寒さを嫌った旅人が一層外套をしっかりとおさえてしまい、北風は外套を脱がせることはできませんでした。

その次に、太陽が燦燦と暖かな日差しを旅人に照りつけました。すると旅人は暑さに耐え切れず、自分から外套を脱いでしまいました。こうして、太陽の勝ち、ということになりました。

「北風と太陽」の話は、私たちが他者と接する際のアプローチについて大切なポイントを示唆しているように思います。北風の力が逆効果を生む一方で、太陽の適切なアプローチによって相手が自ら行動を起こすということです。他者に対する適切なアプローチがどれほど重要かを示してくれています。また物事に対して厳罰で臨むよりも、寛容に対応する方がよい場合もあることを示唆してくれているようです。

子どもたちに指導する際も、ただ、頭ごなしに叱っても改善が見込まれることは少なく、なぜいけなかったのか、どうすればよかったのかなどを考えさせたりして、自分から気付くようにしなければ効果が望めないことは経験上よくあることです。

何かをさせたり気付かせたりしたい時、力でやらせようとするのか、それとも見守り、考えさせながら自ら取り組もうとさせるのか、子育てにも通じる教訓ではないかと思います。「勉強しなさい、勉強しなさい」「ゲームはもう終わり、時間だよ」とただ追い詰めるだけでは上手くいかないことも多いのではないのでしょうか。子どもの主張だけを尊重するのではなく、学校でも子どもの心に寄り添いながら、子ども自らが気付き改めていけるよう指導・支援をしていきます。家庭でもご協力をお願いいたします。